

新技術・新製品・新事業特集号の発刊にあたって

常務執行役員

技術開発本部長 村上 晃 一

地質学者の“私”は月面を調査中、^{はる}遙か遠くの丘の上に何やらキラリと光るきらめきを見つけました。いったい何があるのかと興味を引かれた“私”は、^ははるばる丘を越え、崖を這い登ってそこへ行ってみると…という SF 短編小説があります（A. C. クラーク著「前哨」）。ここで主人公が、まあいいかと思うか思わないかでその後の展開はかなり変わるわけですが、日常生活でもあれ？ということとはちょくちょく起きてはいるものの、たいていの場合は忙しさにかまけて、まあいいかとやり過ごしてしまいがちです。そうでなければ、私のような凡人には寝る間もご飯を食べる間もなくなってしまうでしょう。



しかし、いわゆるイノベーションで名なり財なり残した人たちの伝記を読むと、まあいいかとは思わず^{かんなん}艱難辛苦の丘を越え、崖を這い登ることをしたからこそ宝の山を見つけることができたということが記されています。すなわち、まあいいかと思うか思わぬか、そして行動に移せるかどうか、が普通の人との決定的な差であるようです。そうはいいまして、時間だけは万人に平等でありますから、^{いか}如何な天才とはいえども無限の時間をもつわけではなく、その使い方には格段の注意を払っています。かの S. ジョブズは服選びに時間をかけぬよう、お気に入りの黒シャツとジーンズを何着も用意して、それだけを着ていたという有名な話があります。あるいは寝食忘れて考え続けられる（私の学生時代にはパジャマにネクタイ 2 本着て授業をされた数学の先生がいらっしやいました）ように、時間をかける・かけられる部分が普通の人とは異なるところが、天才の天才たる^{ゆえん}所以なのかもしれません。

ここでまた、しかし、なので恐縮ですが、キラリと光る何かをわざわざ調べに行ってもたいていの場合見つかるものは、なーんだということも結構多いのではないのでしょうか。冒頭の“私”も、切り立った山肌が太陽の反射できらりと光っているだけかもしれないし、まあそんなはずはないよな、でも…、と行動を起こすまではあれこれ考えています。でもやはりあれはそういった通常のキラリではなく別のキラリだとの結論に至って行動するのですが、この見極めというか、あれは何か違うかもしれないと思いに至るかどうか、これもまたイノベーションにとっては大変重要なことのようにです。

見つける、考え続ける、行動する、この 3 拍子^{そろ}が揃わないとほんの偶然をチャンスに変えることはできない。目にはさやかに見えぬ季節の移ろい^{いにしえ}を風の音で知る古の歌人のように、発見した！発見したのだ！と裸で町へ飛び出したギリシャの哲人のように、そしてルビコン川を渡ったローマ人のように、幸運の神様のキラリを見逃さず、つかんで離さないためにはどうしたらよいのだろう。

今号は「新技術・新製品・新事業特集号」です。掲載した記事の一つ一つが果たして真のキラリとなりえるか否か。答えはお客さまとの対話の中にあるのではないかと考えます。お客さまとともに見つけたキラリを一所懸命考えに考え、素早く行動して試して直して、いち早くお客さまとともにイノベーションに変えていく。そういう IHI グループに私たちは変わります。